

イスラーム地域研究 (IAS) 活動報告より

SIAS グループ3・KIAS ユニット4 共催 第1回研究会

(2007年1月6日 於上智大学)

発表題目:「サイド/シャリーフ——基礎的事実とアプローチ」

発表者: 森本一夫 (東京大学)

2007年1月6日、NIHU イスラーム地域研究 SIAS グループ3の第1回研究会が行われ、森本一夫氏による預言者一族に関する発表があった。森本氏は、本研究の3つの方向性として、系譜学、「美德物」、サイド/シャリーフ論があることを示した上で、「サイド/シャリーフ論について押さえておきたい要素」、および「アプローチの道筋の提案」について述べた。前者については、レジュメの1章「サイド/シャリーフとは誰か」で、後者については3章の「サイド/シャリーフへのアプローチ」でそれぞれ説明がなされた。

前者について、サイド/シャリーフとは、第1に、クルアーンの33章33節と42章23節中における言葉によって規定される権利を有するものたちである。また、それに該当するものとして、クライシュ族やアブドマナフ族、ハーシム家 (アッバース家+ターリブ家)、ターリブ家、アリー家、ファーティマ家などが挙げられた。第2に、サイド、シャリーフ、ミール、ハビブ、トラなど、慣習的な尊称によって呼ばれる人々である。しかし、森本氏はファーティマ家を中心とするアリー家、ターリブ家くらいで考えるのがまずは適当であるとした。第3に、男系・女系についてである。男系での血統の継承が基本原則である。しかし、森本氏はファーティマの存在、系譜とシャラフ (シャリーフとしての地位) の相関の微妙さ、女系を認めた社会の広範な存在などの問題があると指摘した。

アプローチの道筋の提案について、4つのアプローチが提起された。第1に、歴史の中のサイド/シャリーフである。ここでは中世モロッコにおける諸王朝下で Charifisme が持った意義などについて、他地域との比較を通じた研究を行うことが挙げられた。第2に、同時代に生きるサイド/シャリーフである。ここでは、エジプトのナキーブ事務所 (タリーカとの関わり)、モロッコのシャリーフ連盟、ナキーブ連盟などの事例が挙げられた。第3に、言説の中のサイド/シャリーフである。ここでは「美德物」を中心とする一連の言説の展開、言説の広がり具合の検討 (「中世的イスラーム」「近現代的イスラーム」(東長)の相違にも注意して) が挙げられた。第4に、解釈の対象としてのサイド/シャリーフである。ここでは「聖遺物」としてのサイド/シャリーフや「内なる異人」としてのサイド/シャリーフが挙げられた。

また、この他にも、レジュメの2章「いくつかの逸話」において、預言者一族にまつわる逸話が紹介された。それには、スンナ派の親サイド/シャリーフ文献 (⇒美德物) に見られる逸話 (粉屋アブー・ハサンの逸話)、聖なる先祖による特別な保護 (夢を通じて顕現、それを喚起するサイド/シャリーフの祈願) などがあった。

質疑応答では、大塚和夫氏が社会集団論的観点から集団概念の精緻化の必要性や男系・女系の分析上の区別、メンバーシップの問題などについて述べた。

報告者 新井一寛 (大阪市立大学)

預言者ムハンマドの血統を持つとされるサイド/シャリーフの研究方法は、写本を主に扱う「系譜学」、マナーキブ（聖者伝/徳業伝）を主に扱う「美德物」、そして発表者のとる「サイド/シャリーフ論」の三つが挙げられる。サイド/シャリーフ論は彼らは何故、どのように尊崇の対象となっているのかを、彼らと彼らを取り巻く社会との関わりを通して分析することをその目的とする。彼らが誰であるかについては聖典や法学といった宗教的次元に根拠を置く規定が存在するが、特に血統の及ぶ範囲の規定については、あらゆる時代や地域に通用する同一のものがあるわけではなく、またサイド/シャリーフに相当する様々な呼称も多数確認される。このような血統の範囲や呼称の整理も、発表者の取り扱うサイド/シャリーフ論の射程に入る。

サイド/シャリーフを実際に認定する制度としては、九世紀後半に設けられたナキーブ制が挙げられる。但しナキーブ制は血統の系譜の統制、管理を行なってきたものの、その認定の根拠としては「周囲の認証」と法廷におけるその証言を採用してきた。このことはサイド/シャリーフの血統が社会性をその根拠として成り立っていることを示す。また血統が社会性を備えていることは、その血統の所有が当該社会において何らかの影響を持っていることを意味する。事実その影響力は、血統所有者に年金支給や免税といった特権を与えてきた。彼らは様々な特権を享受し、社会において守られるべき不可侵な存在とされる。またその血統は所有者の人徳性、正当性を保証し、所有者はそれを政治的な場においても活用することができた。或いはその血統故に彼らはバラカに恵まれており、治癒能力や多産などに恵まれているとされた。

周囲のとるべき彼らへの接し方について教える逸話もある。例えばサイド/シャリーフへの尊崇はその源流となる預言者ムハンマドへの尊崇であるが、しかしその血統は時代を超え、子孫に至るまで尊崇を受けるものとして扱うべきであるということ、またサイド/シャリーフを丁重に扱うことには預言者ムハンマドへの報恩という意味があり、サイド/シャリーフ自身の行ないに周囲が顧慮してはならないということなどを示唆している。

以上の理解に加え、今後も様々な事例を扱いながら当該社会において「サイド/シャリーフであること」の意味に着目して進めることが、発表者の取り扱うサイド/シャリーフ論の中心となる。また新たな研究方法、観点としては、エジプトのナキーブ事務所やモロッコのシャリーフ連盟といった血統の認定組織の調査や、近現代に起こったであろうことが想像できるサイド/シャリーフ崇敬に対する批判の確認、そして預言者の時代より遺され続けた「聖遺物」として彼らを理解することなどが挙げられると述べ、発表が締めくくられた。

報告者 高尾賢一郎（同志社大学）

発表題目：「ハドラマウトのサイド——家系史再構築をめぐる諸問題」

発表者：新井和広（東京外国語大学）

イスラーム地域研究プロジェクトに属するグループ3（スーフィズム・聖者信仰・タリーカをめぐる研究）の第1回目の研究会が、上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究拠点（SIAS）で2007年1月6日に開催された。本研究会では、サイド・シャリーフ（預言者ムハンマドの一族）と、そのネットワークに関する二つの研究発表が行われた。本報告書は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の新井和広氏による「ハドラマウトのサイド——家系史再構築をめぐる諸問題」に関するものである。

ハドラミー・サイドは、イエメンのハドラマウト地方からインド洋周辺地域に移住した預言者一族の子孫である。ハドラミー・サイドは、東アフリカ、インド、東南アジア、紅海沿岸地域、エジプト、オーストラリア、ヨーロッパなどに広がっており、そのネットワークの規模の大きさからも研究上重要な意味をもつ。新井氏の発表は、その家系の一つであるアッタース家の移住の歴史と移住の経路、家系の成立と系図の発展、さらに同家の移住先の社会における位置付けと役割などによって構成されていた。

発表はハドラミー・サイドの起源と祖先から開始される。新井氏によれば、ハドラミー・サイドたちのついでには、イラクのバスラからハドラマウトに移住したアフマド・イブン・イーサー・ムハージル (Ahmad b. 'Isā al-Muhājir d.956) に遡ることができるとされる。ハドラマウト移住後、彼らは当該社会において、部族間の調停、イスラーム諸学の教育、精神的指導 (スーフィー聖者) の役割を担った。

次にハドラミー・サイドのハドラマウトから他の地域への移住、特に東南アジアに拡がったアッタース家に焦点をあて、その歴史が明らかにされる。18世紀に書かれた伝記によれば、東南アジアに移住した最初のアッタース家の構成員は、ウマル・イブン・アブドゥッラフマーン ('Umar b. 'Abd al-Rahmān d.1661) であるとされ、同家の東南アジアへの拡大が17世紀であると推測される。また発表者は、同家からインドネシアにおいては外務大臣や歌手、マレーシアにおいては大学の学長を輩出していることから、同家が東南アジアにおける有力な家系の一つであると考えた。このように東南アジアの有力家系となった同家の系図に関して、発表は展開される。

系図について論じた新井氏は、出版されている系図以外に、公開されず保護されている系図の存在に注目し、両系図には異なる目的があると指摘する。同氏は、前者が外部向けであり、預言者の子孫であるという事実と祖先の偉業を宣伝することを目的する一方、後者は、内部向けであり、オリジナルの文書を外部の目に触れさせないことで、家系メンバー内の結束を強化するためであると考えた。またアッタース家の構成員を結束させる要素を5点あげる。畢竟、第1に共通の祖先をもつという意識、第2にハドラマウトが家系の中心地であること、第3に同族婚や女性を介して他の家系との婚姻、第4にイスラーム学者ネットワーク、第5に祖先の偉業の記録である。さらに新井氏はアッタース家の成功の理由を、構成員の職業的な多様性、異なる社会環境に対する適応力、家庭環境であるとし、発表を締めくくった。

発表後は、研究協力者と参加者たちによるコメント・質問に対して発表者の応答で活発な討論が行われた。

報告者 ダニシマズ・イディリス (京都大学)

上智大学イスラーム地域研究拠点・グループ3の第1回目の研究会 (2007年1月6日開催) では、サイド・シャリーフをテーマとした2つの発表が行われた。以下は、新井和広氏 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手) の発表「ハドラマウトのサイド——家系史再構築をめぐる諸問題」についての報告である。

イエメンのハドラマウト地方からインド洋周辺地域へのアラブ (ハドラミー) 移民の歴史を研究してきた新井氏は、ハドラミーの家系そのものを扱った研究が少ないことに着目し、有力家系の一つであるアッタース家を事例として、家系史の再構築を試みた。

まず、ハドラミー・サイドの概要が述べられた。ここでは、ハドラミー・サイドのハドラマ

ウト社会内での役割、サイド移住前にその役割を担っていたマシャーイフ層との関係、サイド・非サイドの階層分化などが論じられた。

次に、新井氏はアッタース家に焦点を当て、その歴史を論じた。アッタース家は大統領や大臣、議員、学者を輩出するなど、有力家系の一つである。このアッタース家の家系は、17世紀後半に成立した。その詳細な系図の存在により、男子成員の大半の血統を追うことができ、メンバーがある程度厳密に決まることが指摘された。

続いて、家系「史」の問題点が検討された。新井氏は、アッタース家に関して書かれたもののほとんどが聖者伝であることから、聖者とみなされなかった人々の生活が見えてこないという問題点を挙げた。また情報源が少ないことも問題点として挙げている。

その後、議論はハドラーミー・サイド全体の系図に移る。新井氏は、系図には出版されるものと出版されないものがあることに着眼する。そして、出版される系図に関しては、生成された歴史を公開することで、預言者の子孫であるという「事実」と祖先の偉業を宣伝していること。他方、系図を出版しないことについては、オリジナルの文書を外部に出さないことで家系メンバーや他のサイド内の結束を強化する機能があると論じた。

まとめとして、アッタース家の成功、つまり著名な人物を輩出する理由が以下の3点にまとめられた。それは、(1) アッタース家のメンバーが多様であること、(2) 高い教育水準と教育を重視する姿勢に起因する異なる社会への適応力、(3) 親戚にウラマーや学者、政治家がいるという利点をもつ家庭環境の3点である。最後に自分の家系がウラマーや大臣、学者を輩出していることを文書で追えることから、家系を「血統資本」という括り方で論じることは可能か、という問題提起をして発表を終えた。

質疑応答では、「血統資本」の妥当性や、アッタース家の成功とサイド・シャリーフの関係性、系図と系譜の用語法について活発な議論が行われた。

報告者 丸山大介 (京都大学)

CIAS ユニット4・SIAS グループ3共催 第2回研究会 (2007年2月3日 於京都大学)

発表題目：「預言者の医学——ザンジバルの事例から」

発表者：藤井千晶 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

昨年2006年9月～12月に発表者が行なった現地調査の成果が報告された。まず、東アフリカにおける民間医療を扱った先行研究では、儀礼や呪術的な民間医療の中にイスラームの要素を指摘しても、預言者の医学(al-tibb al-nabawī)を個別に取り上げる試みはなかったことが紹介された。昨年の調査は、(1) 預言者の医学に関する出版物調査、(2) 預言者の医学に基づいて治療を行なう3人の人物(医療行為者と呼ぶ)への聞き取り調査であった。(1)の結果として、預言者の医学関連のものはスワヒリ語書籍に多く、現地で広く流通している様子が報告された。(2)の結果として、医療行為者は治療としてドゥアー(祈願)を行ない、薬や護符を与えること、患者からの相談内容は、体の不調以外に家庭問題や対人関係の悩みを含むことが報告された。発表者は、患者は身体的・精神的苦痛からの解放を求めて治療行為者を訪れるのであり、tibu (tibb)は「医学」

というよりも「救うこと、癒すこと」と理解すべきだとした。以上を受けて、出席者からは治療行為者の自称と他称に相違はあるのかという問いや、西洋医療ではなく預言者の医学を選択する理由などは患者側への聞き取りが不可欠だという指摘があった。これらの観点は、今後の調査での課題とされるだろう。

報告者 加藤瑞絵 (東京大学)

発表題目：「タリーカ組織論の射程——共同性と単独性、ミクロからネットワークまで」

発表者：新井一寛

発表者が専門とするエジプトのタリーカを中心としつつ、広範なトピックが扱われた。まずタリーカ組織論の概説、組織形態の分析に有効なモデルの紹介、「共同性」(タリーカや地域社会など諸々の共同体に所属するものとしての個人の性質)と「単独性」(神と対峙する個人の性質)という視点導入の提案などがなされた。続いて、映像人類学の概説として映像の諸形式の紹介や、タリーカ研究における映像活用の意義が述べられた。発表者は次の3つの意義を指摘した。(1)映像を資料、分析対象として活用することができる。(2)宗教実践を記録し、保存できる。(3)感情の高揚や人物の魅力を端的に伝えることができる。最後に、共同研究の枠内にタリーカ組織論研究を位置づけつつ、今後の研究構想が示された。組織論については、より多くの事例を蓄積し、分析を精緻化する意欲が示された。儀礼研究における映像活用の可能性も強調された。出席者からは、組織形態モデルについて、他の地域のタリーカにも適用可能であるかという問いが出された。国家主導で組織化されたエジプトのタリーカは特殊な事例であり、他地域への適用は留保される点が確認された。映像作品という形式で研究者の分析を十分に示し、学問として有意義なものとなりうるのかとの声もあった。これに対し、技術の進歩により容易に映像を利用できる現代の研究者は、積極的に映像資料及び手法を用いるべきだとの応答があり、教育現場で映像の導入が進んでいることも紹介された。さらなる展開の可能性を示す意欲的な発表であった。

報告者 加藤瑞絵 (東京大学)

SIAS グループ3・KIAS ユニット4 共催 研究合宿

(2007年2月27日～2月28日 於 KKR 宮ノ下)

発表題目：「タリーカ像の再検討——ザンジバル北部の事例から」

発表者：藤井千晶 (京都大学)

藤井氏の発表は、ザンジバル北部のマウリディ (マウリド) におけるズィクリ (ズィクル) グループの活動状況の分析を通して、タリーカ像の再検討を行なうものであった。はじめに氏は、19世紀オマーンの首都が遷都されると、ザンジバルはインド洋海域世界や東アフリカでの中心地になり、東アフリカの内陸部へ向かう玄関口ともなったことを述べ、ザンジバルが東アフリカのイスラーム化にとって最も重要な拠点となった歴史的・地理的な概要を説明した。特に19世紀以降のこの地域のイスラーム化はタリーカによる布教活動が中心となっており、ザンジバルにおけるタリーカの

展開を検討することは東アフリカのイスラームを理解するうえでも欠かせないことを指摘した。この地域のタリーカ研究については、研究者によってそれに関する評価が分かれること、その報告数が少ないこと、現在のタリーカの実態は不明であること、タリーカの日常的実践について体系的な研究がなされていないことなどが指摘された。まず氏は、5つのタリーカ(すなわち、〈1〉カーディリー教団、〈2〉シャーズィリー系ヤシュルティー教団、〈3〉リファーイー教団、〈4〉アラウィー教団、〈5〉アフマディー・イドリースィー・ダンドラーウィー教団)に関する文献資料のなかの記述を整理し、先行研究による既存のタリーカのイメージに対して、マウリディへの参与観察と指導者へのインタビューから「ズィクリグループ」という暫定的な集団概念を設定することで本発表の出発点とした。氏の現地調査から抽出されるタリーカの実態としては、全てのグループにズィクリ実践が観察されたという共通点と、グループ名の由来が名祖名かズィクリ名かという相違点が見出された。例えば、カーディリーやシャーズィリーなどはスィルスィラを持ち名祖名をグループ名としているが、一方でその他殆どのグループはスィルスィラを持たず、名祖名ではなくズィクリ名をグループ名の由来としている実態が明らかにされた。また、例えばエジプトのマウリドは預言者生誕祭と聖者祭を指すが、ザンジバルのマウリディは犠牲祭、断食明けの祭、結婚式や出産(通過儀礼)をも含む拡張した意味で捉えられており、このような儀礼においてズィクリは欠かせない要素となっている実態が指摘された。総括として氏は、スィルスィラが存在するシャーズィリーやカーディリーといった従来のタリーカ像とは異なり、ザンジバルにおけるタリーカとはズィクリを行なう集団であること。ザンジバルにおけるマウリディは単に生誕祭のみではなく祭一般や通過儀礼をも含むこと。頻繁に行なわれるマウリディに関わっているものこそがタリーカであり、ザンジバルにおける日常生活の中で、タリーカは重要な役割を担っていることを結論とした。質疑応答では、ズィクリグループ(=タリーカ)の指導者と教団員とで交わされる入門儀礼とイジャーザが実践者たちの間でどのように解釈され実践されているのかという問題関心にそって、ザンジバル革命前後のズィクリグループの連続性、儀礼の継承はいかになされるのかなどの議論が進められた。藤井氏の発表は、儀礼を行なう集団をひとつのキーワードとして現地の人々が認識し実践する「組織」の在り方という実態から、従来の研究によるタリーカのイメージを反省的に再検討するものであり、今後のタリーカ研究を行なう上で重要な手がかりとなるであろう。

報告者 水野裕子(広島大学)

発表題目:「現代シリアの聖者、アフマド・クフターロー研究——そのスーフィズム理解を中心に」
発表者:高尾賢一郎(同志社大学)

高尾賢一郎氏の発表は、グランド・ムフティーや宗教間対話に従事する国際的宗教家、スーフィー教団のシャイフなど多様な側面を有していたアフマド・クフターロー(1912/15?-2004)に関するものであった。今回の発表では、彼をめぐる社会背景や家庭・教育環境を概観し、彼の思想形成の過程について論じた上で、ナクシュバンディー教団のシャイフとしての側面に着目し、彼が行ったスーフィズムやタリーカの発言を通して、クフターローのスーフィズム理解を考察している。発表者は研究史上、クフターローが語られる文脈には2つの方向性があったと主張する。一方は、クフターローの伝記、思想紹介、講話・説話集といった資料をもとに、彼の功績を讃えるものである。もう一方は、全体主義国家としてのシリア、政治活動に多くコミットメントしてきたナクシュ

バンディー教団、世俗化（非宗教化）が進む現代という文脈において、宗教家であり、国家公務員であった彼を政教併せ持った「日和見主義者」として紹介するものである。発表者は、とりわけ前者の資料・先行研究を通して彼の思想形成の過程をまとめ、彼のスーフィズム理解について論じた。まず、クフターローの思想形成の過程の概略について、幼少期～青年期、継承期という2つの時代区分から説明がなされた。彼は幼少期～青年期の時期に、父や多くの同胞による教育活動やフランスに対する抵抗運動を見ながら、シャリーア学者とスーフィー間の調和、学派や党派間の連帯を必要なものとみなすようになったという。こうした背景を受け、クフターローは、イスラーム諸学の調和、学派や宗派にこだわらないイスラームの一体化を目指していったと発表者は論じた。

続いて発表者は、クフターローのスーフィズムに関する言及とその理解について論じる。

クフターローがスーフィズムにイスラーム諸学の中で特別な地位を与え、そこに不可欠な性質を見出している一方、スーフィズムを特別な儀礼や方法を伴うものとはせず、全てのムスリムに開かれたもの、ムスリムの皆が目指し、成し遂げられるものとしてスーフィズムを捉えているということが述べられた。また「サラフィー・スーフィー」と自称し、サラフィーの側面と、スーフィーの側面の両立を試みていたことが論じられた。

最後に、クフターロー研究の課題が提示された。スーフィーとしてのアフマド・クフターローの研究に際しては、文献に限りがあり、タリーカの観察により力を入れていく必要があること、彼の思想や活動の中心にスーフィズムを位置づけることの妥当性を問うために、彼のグランド・ムフティーや国際的宗教家としての側面も理解する必要があることなどが述べられた。

報告者 丸山大介（京都大学）

発表題目：「中世北インドにおける14のハーンワダ」

発表者：二宮文子（京都大学）

二宮氏の発表は、14-15世紀にかけて、インドのスーフィーたちによる文献に頻出する「14ハーンワダ」という語について、その内容や概念を文献史料に依って考察する、というものであった。

発表に際しては、レジュメ、史料リストの他、文献を基に各ハーンワダの内容やそれらの相互関係等をまとめた表が四つ配布された。

発表内容は以下の通りである。まず、「ハーンワダ」という語は、原則として、「タリーカ」と同じくスーフィー教団のグループ分けの一種である。その上で、この「14ハーンワダ」について書かれた様々な文献に引用されている“Risala dar dikr-i cahar pir wa cahardah khanwada”という史料について見てみる。この史料は20程写本が現存するが、作者不明（明らかに虚偽の作者を挙げるものもあるが）で、成立年代については、扱われているスーフィー教団の成立年代等から14世紀後半と推測される。但し、扱われる教団にはいくつかバリエーションがあるため、「14ハーンワダ」という存在がまず想定され、その上で内容が成立していったと考えられる。また、内容としてはチシュティーヤの伝承が入っており、文献伝播の担い手は、原著者についてのアナクロニズムがあることから、教養が低い層と思われる。後世の利用状況としては、写本分布から北インドを中心に16・17世紀以降も参照されていた可能性が高い、とする。

次に、「ハーンワダ」とは如何なる概念か、考察する。文献中の用法では、各教団の修行方法を指す際には「タリーカ」の語が使われており、一方「ハーンワダ」の方はバラカを指すのに用

いられている。よって、「ハーンワーダ」はバラカを重視した概念である。そしてそのことからすると、ハーンワーダへの帰属にはバラカの所有が実践よりもウェートを占めたと考えられ、故にハーンワーダへ入るハードルは低くなり、このことが教団の大衆化を促すことになった、と考えられる。更に、この語の原義は「族」という意味であり、教団同士は師弟関係という形でスィルスィラの連なりとして表象されることから、「14 ハーンワーダ」全体が「一つの族」・個別化しない連なった諸スーフイー教団という形を持っている。これは多数のバラカ所持をよしとする風潮の反映と考えられる。

最後に、「偽作」である文献が早い段階で流布していたインドの現実にあって、今の目からすると「怪しい」それらの文献を如何に歴史学の枠の中で扱うか、といった将来的かつ根本的課題を提示する形にて、発表は締めくくられた。

質疑応答の際には、以下のような指摘がなされた。「14」や「4」といった数字の象徴性がありうる、ということや、アナクロニズムの存在から伝播主体の教養が低いと決め付けることはできない、ということである。

報告者 角尾宣信 (東京大学)

CIAS 国際ワークショップ「パレスチナ問題とイスラーム世界の連帯」
(2007年3月10日 於京都大学)

第一部 基調講演：Dr. Azzam Tamimi (イスラーム政治思想研究所)

タイトル：“Palestine Question and Islamic Movement: The Ikhwan (Muslim Brotherhood) Roots of Hamas”

第二部 パネルディスカッション

報告1：小杉 泰 (京都大学)

タイトル：“Palestine Question as a Major Focus of the Islamic World: Its Prospects and Research Themes”

報告2：白杵 陽 (日本女子大学)

タイトル：“Palestine Studies in Japan: An IAS Perspective”

報告3：飛奈裕美 (京都大学)

タイトル：“Non-Violent Resistance in East Jerusalem: A Case Study”

コメンテーター：Dr. Azzam Tamimi

総合司会：末近 浩太 (立命館大学)

NIHU プログラム・イスラーム地域研究 2006 年度第 3 回合同集会
(2007年3月27日 於早稲田大学)

概要：

2006年度のイスラーム地域研究事業の総まとめとして、第3回合同集会を開催した。各拠点の研究分担者・研究協力者など計67名が参加した。

第一部の事業報告では、佐藤次高研究代表を含め、各拠点の拠点代表者および研究グループのグループリーダー、計 10 名から、それぞれ 2006 年度の活動と、2007 年度の展望についての報告がなされた。これにより、普段は各拠点に分かれて活動している分担者・協力者も、イスラーム地域研究事業全体の進捗状況を確認することができた。

第二部は、「アラブ音楽を語る・聴く」と題して、中町信孝氏（日本学術振興会特別研究員）がエジプト・ポップスを中心としたアラブ音楽を題材に語った。豊富な音源・ビデオクリップにより、ここ 10 年ほどのアラブ世界の流行歌が紹介されたが、その中には、アラブ民族主義、エジプト・ナショナリズム、イスラーム意識の高揚などとも関連づけられるメッセージソングがあることが示された。大衆文化を通したイスラーム地域研究という新たな研究の可能性を感じさせる、非常に刺激的な報告であった。

なお、当日、再生された曲目リストは、以下の通りである。

1. Umm Kulthūm, Al-Ward Jamīl, 1947. (From movie Fāṭimah)
2. Umm Kulthūm, Ha-uqābil-hu Bukrah, 1947. (From movie Fāṭimah)
3. Nānsī ‘Ajram, Yā Walad Yā Thaqīl, 2004. (From movie Khalli Bāla-ka min Zūzū, 1972)
4. Shīrīn ‘Abd al-Wahhāb, Mā fi-sh Marrah, 2005.
5. ‘Amr Diyāb, Al-Quds dī Arḍ-nā, 2000.
6. Various Artists, Al-Quds Ha-tarji‘ la-nā, 2000.
7. Various Artists, Waṭanī al-Akbar, 1960?
8. Various Artists, Al-Ḥulm al-‘Arabī, 1998.
9. Sha‘bān ‘Abd al-Raḥīm, Al-Ḍarb fī al-‘Irāq, 2003.
10. Kāzīm al-Sāhir et al., Baghdād Lā Tata’allamī, 2003.
11. Kāzīm al-Sāhir, Aḥibbī-nī, 2004.
12. Nānsī ‘Ajram, Anā Miṣrī, 2005.
13. Shīrīn ‘Abd al-Wahhāb & Muḥammad Nūr, Baladī, 2005.
14. Various Artists, Aḥsan Nās, 2006. (From TV commercial Mobinil)
15. Sāmī Yūsuf, Mu‘allim, 2004.
16. WAMA, Kān Nafsī, 2005.
17. Ḥusayn al-Jasamī, Yā Ṣuḡhr al-Farah fī Qalbī, 2004.
18. Sha‘bān ‘Abd al-Raḥīm, Ithnān ‘Asākīr, 2006.
19. Shīrīn ‘Abd al-Wahhāb, Lubnān fī Qalbī, 2006.
20. Nānsī ‘Ajram, Lubnān, Ḥabīb al-‘Umr, 2006.

報告者 佐藤健太郎（早稲田大学）